

かささぎ 通信 第90号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2020年 3月 13日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二〇年二月の「森三郎の作品を読む会」では『森三郎童話選集夜長物語』（一九九六年、刈谷市教育委員会）所収の「一人相撲」を読みました。

「一人相撲」（初出『赤い鳥』一九三三年七月号）は、ちょうど五年前二〇一五年二月の「森三郎の作品を読む会」でも既に読んだ作品です。その会の報告「かささぎ通信」第32号では、大道芸の一人相撲の臨場感あふれる描写について触れました。

その後、森三郎の兄・森銑三の『月夜車』（一九八四年十一月、弥生書房）を読んでいると、附録として「大道芸のなし」があり、その中の「独相撲」の綾瀬川と小柳の取り組みを面白おかしく一人でやってみせる白髪まじりの老人の話が、森三郎の「一人相撲」の中の大道芸の描写とよく似ていることに気づきました。銑三の「大道芸のなし」には「小引」が付いていて、これは銑三が松岡於菟衛翁から聞いた話を筆記しまとめたものであると書かれています。初めは雑誌『今昔』一九三三年二・三・四月号に「故松岡於菟衛」の署名で発表されたことも分かりました。『森銑三著作集続編』第十三巻（P.570）。松岡於菟衛は、銑三が一九二六年に帝国大学史料編纂所に勤務した時、そこで写字生をしていて、銑三は松岡から多大の啓発を受けたという間柄です。三郎の「一人相撲」が『赤い鳥』に発表されたのは一九三三年七月号ですから、銑三が雑誌『今昔』に発表した「独相撲」を元に、三郎はこの作品を書いたと推測できます。三郎作品の一人相撲の場面では、会話を多くして見物人の反応を生き生きと描いており、読んでいる子どももどちらが勝つかと思わず力が入りそうな感じですが、これまでも古典の作品を子ども向けに再話した童話をたくさん書いてきた三郎ならではの描写力だと思われれます。

さらにこの「一人相撲」には、原話を取り込んで自分の作品に作り上げていく三郎の創作手法がよく表れています。

この話の主人公は「庄太」という寺子屋に通う少年です。お里おばさん（お父さんの妹）から、寺子屋の帰りに広小路の紅久という小間物屋で棒紅を買ってきてと頼まれます。一度は断わったものの、おつりで飴ん坊を買ってもいいと言われ、庄太の心は動きまわります。勘ちゃんに広小路まで一緒に行ってもらい、途中で勘ちゃんに誘われるままに一人相撲を見物する人だかりの輪に入って、夢中になってしまいます。その後、紅久まで紅を買いに行き、一人相撲を見ている間に巾着切りにお金をすられたことに気づいたのでした。庄太は元はと言えば勘ちゃんが悪いのだとつつけんどんにしますが、お母さんに正直に話した後、勘ちゃんに気の毒だったと後悔します。

朝からのおばさんとのやりとり、子どもだけで広小路までお使いに行ったこと、そこで見た一人相撲のこと、飴ん坊どころかお金をすられてしまったこと、たった一日の様々な出来事の中で庄太の心が揺れ動く様を描く作品になっています。一日の出来事を通して微妙に揺れる小学六年生の少年の心理を描いた「雪」（初出『赤い鳥』一九三三年四月号）に通じる描き方です。「雪」は森三郎の代表作に推す声も高く、「かささぎ通信」28号・82号で取り上げました。

庄太の気持が落ち着くきっかけは近所の子どもたちと「こうもり、こおい」と叫ぶ勘ちゃんの声を聞いたことでした。「秋蟬」（初出『赤い鳥』一九三四年二月号）の終わりも主人公の気持ちを象徴しているような「カナカナカナ」と鳴く蟬の音が印象的でした。声や音に主人公の心理を暗示させるのも三郎作品の特徴だと思います。

次回「森三郎の作品を読む会」

二〇二〇年四月十日（金） 午後一時半～三時半

「銀作」（『森三郎童話選集 夜長物語』所収）

三月の「森三郎の作品を読む会」は新型コロナウイルス感染症対策による図書館の休館のため、休会になりました。